説教要旨『すべての民の旗印』

イザヤ書　１１章１～１０節

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育」つ（1節）。「エッサイ」というのは、古代イスラエル王国のダビデ王の父親ですが、その子孫から、新しい芽が生まれてくることを待ち望んでいる言葉です。そして、初期のキリスト者達は、その新しい芽こそ、イエス・キリストのことを指し示していると理解してきました。そのなかでイメージされてきたのは、ダビデ王のようにイスラエル王国を隆盛し、力と威厳に満ちた血筋を引いている救い主イエスの姿です。しかし、そうであれば、なぜ「ダビデの株」ではなく、「エッサイの株」と表現しているのか、なぜ「大木」ではなく、「株」と表現しているのか…どうも、イザヤ書が伝えようとしている救い主のイメージとは違うようです。「エッサイ」は名の知られぬ村の出身者です。「株」とは、切り株のことで、イスラエル王国滅亡の歴史が暗示されています。つまり、「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで」るとは、よもやそこから何も生み出されるはずがないと思われていたところから、新しい何かが芽生えていった希望の世界がイメージされているのです。

「エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う」（10 節）とあります。切り株を囲んで、あらゆる人が集まっている情景を思い浮かべます。互いに背負っている痛みや悲しみを持ち寄りながら、切り株から新しい芽が出ようとする瞬間を一緒に見ようとしている情景です。作家で住職の玄侑宗久さんは、ある番組で、「自分の苦しみのちょっと先を見せてもらう」という内容の授業をしていました。人生の先輩である両親や年配の方に、自分達と同じ小学生の頃に苦しんでいたことはないかを聞き、また、自分の苦しみを打ち明け、それを今、どう受け止め直すことができるのかを一緒に考えるのです。それによって自分の苦しみが解決される訳ではありません。しかし、苦しみの先をちょっと見せてもらうことで、一緒に見ようとすることで、“今に絶望しない”という希望が示されるのです。

十字架は、教会の旗印です。それ自体は、イエスの体を引き裂いた残酷な処刑道具であり、決して美しいものではありません。しかし、教会はその十字架の先にイエスの復活を見ています。抹殺されたはずのイエスの命…もはやそこから何も生み出されるはずがないと思えるようなところから、新たに生きる命の道を主が切り開いておられることを、十字架を通して見ているのです。

（文責：望月達朗牧師）